

平成15年度文部科学省補助事業「教材等研究・開発等」

「日本語学校における就学生援助に関する協働プロジェクト

ーピアサポートを応用した母語別交流会の試み」

＜本年度の研究結果＞

本研究は2002年度から約2年間にわたり、現状では専門の異文化間のカウンセラーをおくことのできない日本語学校で、同じ国の出身で母語を同じにし、現在同じような境遇にある学生同士がサポートし、助けあうというピアサポートの考え方を応用した援助システムを構築しようと試みたものである。

まず、今年度の研究は昨年度の研究の結果と気づきをふまえ、母語別交流会の内容構成に工夫を加え、年4回の交流会がそれぞれ異なるようにした。母語別交流会終了後の学生へのアンケートにおいて「母語で交流できる／生活や学習面での情報交換ができる／楽しい／簡単な相談ができる」など母語別交流会は概ね意義のあるものとして捉えられている。また、同じ学生リーダー及び教師が複数回続けて交流会を担当することで、そのグループに合ったプログラムの改善が行われ、交流会は昨年度に比べ特徴が生まれ、多彩になったように思える。

一方、東南アジアグループや欧州グループなど参加者が複数の国にまたがるグループからは「共通した言語が日本語だけでコミュニケーションがとりにくい」「大きすぎる」「まとめにくい」など、一部不満が寄せられている。しかしこれらのグループでも母語別交流会は概ね受け入れられ、「いろいろな人と知り合える」というような肯定的意見も多い。多国籍の学生を含む大きなグループの運営の仕方、まとめ方、および1ヵ国に1名の学生しかいない場合、どこのグループに所属するかなどは、来年度も引き続き検討していきたいと思っている。

第二に今年度は卒業生を招いての母語別交流会を行い、日本語学校の最長2年という枠組みを越え、縦に長い層の厚いネットワークを整えようと試みた。これはどのグループからも概ね高い評価を得た。それは進学問題、学習問題など、現在の学生の抱える問題が、かつて卒業生が経験し、克服した問題と同じであり、直接アドバイスをもらえたことも理由の一つだろう。一方、参加した卒業生からも「継続してほしい」という声があがった。学外への就学生援助のひろがり今年度の目的の一つであり、来年度はさらに大きく堅固なネットワーク作り、連携を考えていきたいと思っている。

今年度は教師をファシリテータとして位置付け、そのための教師研修を行った。4回の研修は、これらの研修は教師同士の協働、また個人のコミュニケーションを振り返る上での参考になったと思う。一方母語別交流会運営上の問題点として、学生リーダーから「全くその言語を理解しない教師が担当した場合の教師の役割は何か、どのように協働したらよいのか」との指摘も受け、これらの問題も来年度への課題として引き続き検討していきたい。

昨年度学生リーダーミーティングで意見として出された「6ヵ月目の危機」に関しては、今年度追跡調査を行った。来年度は就学生を中心に「6ヵ月目の危機」に関する調査、または母語を用いたインタビューを継続的に続け、外国人学生の援助支援の時期、母語別交流会の役割などを考えていく必要がある。最後に学生リーダーの成長も一つの成果としてあげられるだろう。今年度は各グループで同じリーダーが複数回継続して交流会を担当した。学生リーダーは自分のことだけでなく相手に配慮するという意識できていたことがミーティング記録から観察された。各グループのリーダーが学校や教師と協働し主体的に活動することができれば、さらに援助や支援の関係が円滑に進むのではないだろうか。

以上、母語別交流会が就学生援助のシステムとして有効かどうかを検証するための行った今年度の研



究事項をまとめた。

新しい視点と試み

今年度は母語別交流会を進めて行く上で、いくつかの予期せぬ効果や試みがあった。以下は就学生の援助システムを構築するためにも必要だと思われるので、簡単にまとめ、報告したい。

1)危機管理

2003～2004年は留学生、就学生にとっては留学生生活を脅かす危機に度々見舞われた。まず2003年初頭から秋まで続いたSARS、次に2003年の中頃から現在まで続く組織犯罪、そして昨年秋頃にあった地震被災時の対応である。

特に緊急性が高く、正確な情報を学生に伝え、学生全体の意志を統一しなければならない様な事案において、本校では母語別交流会によって培われたネットワークを利用した。

このようなケースの場合、一堂に学生を集めて連絡する方法が確実と思われるかもしれないが、大人数が集まった説明の場では参加者にわからない点があっても、直接発表者には質問しにくい。また全員の集中力を維持し続けるのは難しく、結果として話し手の意図した内容は受け手にはなかなか伝わりにくいことになってしまうことも少なくないと思われる。

本校でとった方法は、(1)まず各母語別のグループのファシリテータである講師にレクチャーを行い、説明の意図を明確にする。(2)その後、講師と母語別グループリーダーがグループで話す内容、方法について打ち合わせを行う。(3)母語別グループ内で学生のグループリーダー、または必要に応じてファシリテータである担当教師も加わりグループの説明に当たる。(4)その後、これも必要に応じて学生全員が集まって学校の事務職員からの説明を聞くという方法だった。

この方法の場合、打ち合わせの段階に手間がかかるのと、リーダーではない普通の学生に伝わるまでに正確な意図が維持できるよう、打ち合わせの段階で明確な情報提供をしておく必要があった。その反面、母語別交流会やこうした危機管理に関する説明会を重ねる毎に説明する側である学生グループリーダーと受け手である一般の学生の間に信頼関係ができていき、聞き手側が抵抗感を持たずに聞くことが出来るという傾向が見られた。グループそれぞれが少人数で学生の母語で行われているため、多くのグループで不明点があったら質問をしやすいという雰囲気を作ることができた。その結果、日本語学習でどのレベルにある在校生に対しても抵抗感なく受け入れられ、正確な情報が浸透しやすいということがわかった。

これはピアサポートの試みである母語別グループの本来の趣旨からは若干離れているが、予想外の大きな副産物と言える。

2)韓国人学生の運営するホームページ

近年急速に発展、普及しているインターネットを通じて在学生と卒業生のピアサポートの場としてのコミュニティを作るアイデアが校内で出始めた頃、韓国語グループリーダーの学生から自主的に同様の趣旨のことをやりたいという申し出があり、学生主導でweb上にコミュニティを作ってもらうことにし



た。これは韓国のインターネットのサービスで登録した人同士が意見交換をする掲示板や写真などのファイルを共有する資料室といったサービスを備えるものを利用したものである。
<http://cafe.daum.net/kaij/>

2004年2月に開始し2ヵ月あまり経った現在、68名のメンバーが登録されている。これは韓国からの在学学生総数約50名であること、校内の告知と当校のwebサイトからの誘導のみで登録されたことを考えると、非常に多い人数だと考えられる。この試みの本当の成果が現れるのにはまだ時間がかかると思われるが、韓国のようにネットによるコミュニケーションが進んだ国の学生にとっては親和性の高い方法であり、今後他の国々もこの方向性に向かっていくことが予想されるので、将来的には有効な方法となることが期待される。

3) プロセスリーダー・トレーニングへの参加

プロセスリーダー・トレーニングは、傾聴と自己表現を基本にしたリーダーシップの態度と技法を身につけるためのものである。このトレーニングを続けることで、実際に人と人との間で生じる様々な対立、「どう解決していいかわからない」という場面での問題を明らかにして、メンバーが持っている力量を発揮させる事で解決策を導き出していけるようになると言われている。

2004年3月に行われた教師のための「ピアサポート研修」の講師、立教池袋中高教諭の高野利雄氏より紹介された高校生のための「プロセスリーダー・トレーニング」に母語別交流会から学生リーダーおよび希望者14名を1日の研修会に送り出すことにした。

プロセスリーダー・トレーニングへの学生の参加は2つの意味がある。第一に今年度の目標の一つである学校外へのネットワークを広げる、ということである。参加者の中にはなかなか日本人と接触の持てない学生も含まれた。日本人との交流という面でも意義がある試みになるのではないかと考えた。第二には学生リーダーおよびグループ内で学生リーダーをサポートする学生を育てる、ということである。学生が学生をサポートするという意識を高めるためにもこのようなトレーニングが必要であるように思う。

日時：3月16日（火曜日）10時～16時

場所：国立オリンピック青少年センター

参加者：中国5名 韓国3名、インドネシア1名、フィリピン1名、スイス1名

スペイン1名、コートジボアール1名、アメリカ1名、計14名

参加者のプロセスリーダー・トレーニングへの参加の感想は概ね肯定的だったように思う。

「楽しかった」という感想と同じように「自分のためになった」と答えた人が多かった。

また自由記述からは参加者が自分自身と人とのつながりについて、また傾聴や自己表現の大切さに何らかの気づきを得たことが伺える。とくに「交流会のリーダーをしている時、自分の言いたいことだけ伝えるのではなく、相手の言いたいこと聞きたいこともわからなくてはならない」というように、母語別交流会のリーダーを意識した学生がいたことは成果の一つにあげられるのではないだろうか。

プロセスリーダー・トレーニングへの学生の参加は、外国人学生同士の支援に一つの発展的な方向性を与えるものとして、今後も外部と連携を深めながら、積極的に進めていきたい。



今後の課題

ピアサポートを応用した母語別交流会は留学生の援助支援を考える上で、どのような役割を果たしているのだろうか。

外国人学生が来日した時点で、「家族や親戚、友人がすでに日本国内にいる」「社会的な支援を受けることができる」という学生はあまり多くはないはずである。人的・社会的ネットワークのない学生がネットワーク作りのできる場、何か問題を抱えた時に気軽に相談できるのは母語別交流会をはじめとする「交流」の場ではないだろうか。

従来は何か問題が起こった時に、その問題に合った対応や援助、あるいはカウンセリングなどが行われてきた。しかし、現在外国人学生をとりまく社会的環境は以前に比べて厳しくなっていると言わざるを得ない。何か問題が起こってからの問題解決型の対応では援助や支援が十分にできないという場合もあるだろう。

母語別交流会はそのような状況を未然に防ぎ、それを学校側だけでなく学生同士が教師や学校、卒業生、学外の関係者と協働して支援を行い解決していこうという開発的・予防的視点を基盤にしていると考えてよいのではないだろうか。

さて、来年度は今年度の母語別交流会の目的を引き継ぎ、卒業生、さらに学外の支援団体や他校とのネットワークの拡充をはかりたいと思う。またファシリテータとして母語別交流会を支援できる教師の研修、学生リーダーの育成、母語の枠を越えた学生間のピアサポートの可能性などをさぐりながら、2002年度から始まった本研究の最終年として「日本語学校における積極的な外国人学生の支援を目的とした就学生援助システムの構築」を試みたいと思っている。

